

自序

本書に記載する所の論文は、皆舊稿にして、表題の示すが如く、断片の漫錄なれば、一貫したる主意の、あるにあらず。今より顧れば、考證精もからざる所あり、推敲足らざる所ありといへども、五篇各々、其の説く所、自ら潛かに創發の見解と信ずる所のも、のなきにあらず。故に之を一巻を爲して刊行するは、聊か明治文學に寄與せんとする余が微衷に外ならざるのみ。

明治三十二年七月

著者 大島正健識

音韻漫錄目錄

一、地方發音の變化及び其配布

二、擦音と促音

三、音便の説

四、ハヒフヘホ古音考

五、タナツテト古音考

音韻漫錄

大島正健著

地方發音の變化及び其配布

凡そ他國に移りて、長く其地に住居し、能く其言語に通じ、其使用に熟練する者といへども、最も學び難きは、其緩急抑揚の音調にありて、其差異に由り、知らず識らず、己が生國を現はずは至ることあるは、常に見る所なり。各々其郷里に於いて、小兒の時より習、覚えたる發音は、口の開き方、唇の合はせ方、舌の動かし方、皆様々異なる所ありて、其癖頗に残り、容易に變更すること能はず。是を以て、九州音は奥羽音に似ず、關西音は關東音に同じからず。外國語を學ぶ時に於いてすらも、各々其自國の流に隨ひて發音するが故、同一の語に對し、其響種々に分れ、之を矯正するに、語

學教師の、常に大に困難を感じるは、経験ある者の、皆能く知る所なり。北海道の土人の如きは、中には本州人と異なる所なく、巧に日本語を操る者ありといへども、其發音を聞けば、少し聞慣れたる者は、何人といへども、容易く其の蝦夷訛たるを悟り得べし。常に諸國の人々に接し、或は長く諸國を遊歴したる人は、他人の發音のみを耳にし、是は盛岡、是は仙臺、是は東京、是は名古屋、是は金澤、是は大阪、是は岡山、是は高知、是は熊本を、一々分別を立つるは、左のみひづかしき事にはあらざるべし。

若し發音の爲方、及び其緩急抑揚等を、形式に顯はす完全の法ありとせば、是に由りて、人類の地上配布の迹を探り、其往古の歴史に溯らば、只單に語根語頭語尾の關係、及び文法の組立のみによりて、類別するに比すれば、其法更に勝れる所あるべし。然れども、今日の博言學、未だ其域に達すると能はざるは、遺憾の事といふべし。有名なるグリンム氏の發音表

記法の如きは、實に斯道に一大進歩を與へたるものなり。將來此發音表記法の、尙更に精密に赴き、盛んに使用せられて、人類學の研究に、少からざる便益を與ふるに至るべきは、余の信じて疑はざる所なり。

我國の言語の發音、及び其緩急抑揚を示すに、未だ適當の法を有せず。現今使用的羅馬字の、之を寫すに甚だ不完全なる所多きは、西洋人の、一は羅馬字に由りて、我日本語を學ぶ者の、本邦人と、大に異なる發音を用ひ、聽者をして、屢々其意味の了解に苦しむしむるとあるを見ても、容易に悟ることを得べし。然れども、今日の場合にては、他に良法なきを以て、不完全ながらも、發音を寫すは、羅馬字に頼らざるを得ず。余は未だ我祖先の地上配布の如き、大問題を探究する抱負、あらずといへども、今姑く羅馬字を以て、余が聞知する所の、諸方の郷音を比較し、聊か余が意見を附して、歴史研究の一助と爲さんとす。

シの音羅馬字にて shi を記す。此音東京邊にては shi と si の間の音にて、
shi に近く si に遠し。九州、山陰、北陸には、全く shi の音なる處多し。諸國概し
て、先づ shi の方なり。奥羽にては、此音崩れて shi と si とを区別し
難し。

この音羅馬字にて shi を記す。東京邊は此音なり。諸國又此音多し。九州の
大分、福岡、佐賀、長崎、熊本、山陰の島根、北陸の石川、富山、新潟、東山の山形、秋
田、青森の諸縣に、she の音多し。即ち先生のセンセイを sensei といはずし
て shenshei といひ、濁音にて、錢のゼニを zeni といはずして、jeni といふが
如し。此音畿内にても折々現はることあり。

この音は全國通じて有なるが如し。されば蛙のサケを shake、三昧線のサ
ニゼンを shanisen、鞆體のサレカウニを sharekubé、蛇のサタリを shakuri、左

官のサクリンを shakwan、躰のサガムを shagam、石榴のザクロを jakuro、戲
のザル、を jaruru、躰のクサメを kusham、乾のバサグを hashagur、杓のヒサ
タを hishaku といふが如きを見れば、ザビ shi の音もあるが如し。

ソビスの兩音も、ソウデ、ゴザリマスを、ショウ (shū) デゴジャ (jū) リマシユ
(shū) と、強く shi 音に響かす人あるを見たり。岡山縣西北部の人と記憶す。
我佐行の父音の古音を考ふるに、是は今九州音の如く全く shi なりし
ならんかと思はる。sh の s 脱落ちて其迹に h を残し、或は h を落して s
を残せる地方多きを以て證となすべし。この如き英語の綴字法は、強ち
に音の標準となし難しといへども、自然の發音より、佐行拗音の方を古
音と見ると適當なるべし。

畿内及び山陰山陽の東部に於いて、行きをセンの音を行きをヘンと
かす。大阪邊のおまへんの如きは、特徴の音として、他國人には耳立ちて

きこゆる所なり。セの原音^セなりしが故、^セの落つる^セとなるなり。ヘンは更に^セを落してエンとなることあり。行き^セヘンを行き^セエンといふが如し。奈良にては行きメエンといふ。西京邊にては、行き^セセウを行き^セホウといふ。^セの音より^セを取れば^セと變はるなり。尙地方に由りては、行き^セヒヨウ^セ、^セ音を加へて響かす處あり。又行き^セサレタを行き^セハツタ^セ、或は行かハツタといふ處あり。サ^セの音本^セシャなりじ。とせば、此轉化の説明容易なり。淨瑠璃には、言はシヤル音ハシヤンスの語あり。是はサル、サンスのサ^セ音に響かせしなり。このいはシヤル、今は^セを落していはハルとなる。奈良邊にては、行き^セサル、往^セサルを、い^セヘル、い^セヘルといふ。是は行かハル、往なハルの訛なり。彼方様のあなたサマ^セを、あんたハ^セといふも、^セより^セの落ちたる例なり。御前様のおまヘナマ^セを、おまハ^セといふが如きは、遙かに北の方、東京邊

に於ても、きく所なれど、是は畿内音の移入りて、ある階級の人々に傳播せしと思はる、理由あるなり。兒童又婦女の言に、サンをサヤンといふも、サンに近しと知るべし。又同ヒサンをヤンと呼ふことあり。是はサのシヤを^セとせずして、^セとなし、^セを落して、^セの形を取りたるものと見做すことを得べし。

文語の^セ音、口頭にては、屢々^セ音に用ひらるゝことあり。仰セラルをれ^セシャル、入らせラルをいらつシャル、言はセラルをいはツシャル、又いはシャルといふは其例なり。是等は皆セの九州音の如く、シエなりしを確かむる證となるべし。前に出だせる鮭のサケ、シャケ、吃逆のサクリ、シヤクリ、戯のザル、ジャレルの類は、通例直音の方を雅となし、拗音の方を俗となせ、右は直音より拗音に訛れるにあらずして、拗音の方原音なりしかも知る可らず。昔し支那音を和音に寫したるとき、拗音を殊に直

音に換へたることあり、又或は其當時記したる我音の拗音なりしも、後變はりて直音となり、後世に至り、其變化に心付かざるものもあるべし。七質の音シナなるべきを、屢々ヒヂと呼ぶは、是も又ヨリシよりヨの落ちたるものと見て可なるべきか、尤も逆にヒよりシに訛り、響かす音もあるが故、是は一概には論すること能はず。シをヒに訛るは、最も信越地方に多し。大和にも此訛舛あり。sとhの轉換は、歐洲語などにても多く見受くる所なり。

畿内及び其近傍の國の中には、其ノをホノ、其レをホレ、然ウシテをホウシテといひて、hをsの位置に用ゐる處あり、是も又sのsを落したるものと考ふるも、差支なかるべし。

さて佐行父音の由なりしこと疑なしとせば、其音は今sh shの三種となりて、諸國に散布するを見るなり。

shは出雲を中心とし、南は九州に蔓延し、東より北は、鳥取縣、兵庫縣、京都府、福井縣に於いて、暫く迹を藏し、石川縣、富山縣に於いて、再び現はれ、新潟縣には、例外あるに似たれど、大體日本海に沿ひて、奥羽に入り、其痕迹を留むるが如し。

sは東海、東山、山陽、山陰、南海諸道の大部分に行はるゝ音なり。此等の諸國といへども、シ音に至りては、全くsと響かす處ありや、未だ其証を得ず。h音を用ゐる處にては、s音なしといふにはあらずして、通例の場合には、多く其音を用ゐるなり。

前の諸國は、拗音を嫌む傾向ありて、原音shのhを取りて、sの方を響かすに反し、畿内及び山陰、山陽の東部、紀伊、伊勢、伊賀、近江、若狭、越前の畿内音の相混する地方に於いては、出氣音のsを落し、平坦なる音を好み、其體にしてhを用ゐ来れるなり。

波音は元來唇音にして、現今諸國に於いて、行はるゝが如き、唇音にあらざりしは、吾も人も知る所なれば、今重ねて繰返し、之を説明する要なからべし。此唇音は現今のフ音の如く、口内より出づる息の、軽く唇に接して、生ずる音なり。此音羅馬字の、英の *f* の如く、下唇に上歯を當て、響かす音にはあらず。西洋人の、富士山、東京府等の、フ音を響かすに當り、我國人の耳には、異様にきこゆるは、これ我フ音を辨へずして、之に當て、*f* 音を用ゐるに由りてなり。波行の父音は、稍輕き *w* 音に近きが故、言の中或は下にあるときは、ハヒフヘホは、ワヰウヰヲと混するに至れるなり。而して、今は又ヰエヲビイエオと、其區別を失ひしに由り、ヒヘホは、イエオにも通ふに至る。ワ音とア音と、今も尙其區別あるは、全くアは母韻の中、其口の開き方、最も廣く、其發音最も強きに由りてなるべし。是故に唇のハ音も、又ア音と混せざるなり。

他所にては、既に脱け、或は變はりたる波音、今も尙其僅存する地方あり。其一例、九州にて、則に對するスナハチの、ハを強く響かすが如し。熊本の人の、食フといふ言の、フを出氣音にて響かすが如きも、亦波音の痕迹を留むるものと見做して可なるべし。

唇波音の地上の配布を考ふるに、遺憾ながら、余未だ材料を蒐むると多からざるが故、充分斷定を下すと能はずといへども、出雲は、慥かに其中心なり。此音、山陰の他の諸國に隠れて、北陸に至りて、再び現はれ、奥羽諸國にては、此音のみにて、ハヒヘホの喉音を有せざる地多し。此中ヒへの二音に於いて、最も然りとす。即ち百をフヒタク、兵をフヘイといふが如し。他の諸道に於いては、概して此音なし。九州の土音には、此音ある地方ありといふ、憾むらくは就いて正したることなきが故、其の果たして確

實なるや否や、未だ知ること能はず、余が臆測に由れば、九州に此音の存在すべきを至當とす。薩摩人に此音を響かす者は、親しく耳にせし所なり。

カ(ka)音 及び クワ(kwa)音

拗音のクワは、諸國に於いて、多くは直音のカと變はれり。クワ音の配布を探るに、九州に存じ、出雲になし、山陰の他處及び山陽畿内に散見し、北陸の中部より、北部に至りて、強く現はれ、又大體奥羽の西部に於いて、其力を占む。奥羽人の中には、クワのみならず、クエ、クヰの拗音を響かし得る者あり。青森縣人を最も然りとす。其クヰ音しばしば「*カニ*」又「*ケニ*」の如くきこゆ。四國の土佐は、古語の存する地なれど、カニクワは區別すると能はざるは、諺しといふべし。

加行濁父音(ka) 及び 半濁父音(ka)

本濁音は、ガギグゴ、半濁音は、ガギグゴなり。言の上にあるときは、諸國大方は本濁音を用ゐる。此場合に、參州の人に、半濁音を用ゐる者わるを見たり。又濃州にも此音あるを見れば、參尾濃の間に、語頭の半濁音は、存在するならんか。其例は五合をゴンゴウ、御坐をゴザルといふが如し。淡路にも、此音あるが如し。言の中又は下又は助辭には、半濁音を用ゐる處多し。萩をハギ、下髪をサケガミ、反故籠をホクカゴ、我國をリガタニといふが如し。

本濁音のみを用ゐる地方を原なるは、九州一隅、四國の西部、山陰、山陽の西部及び中部、北陸の中部及び北部にして、就中越後に於いては、此音最も強くきこゆ。

畿内にては、助辭又言の中或は下にある者は、本濁なるか半濁なるか、其別甚だ聞分けがたし。再三再四正して後、漸く兩音の相混じて、併び行は

るかを疑ふに至る。山陽山陰の東部、東海、東山、北陸の南部は、粗獷内に開じ、大和の南部を経て、紀伊に至れば、全く半濁音を用ひざる地方ありと聞く。是は稍訝しきことなり。ガギググゴは鼻音なり。大和には一種の鼻音あり。羅馬字にて表はし難し。畿内の西部及び紀伊の西南部は、其音を親しく耳にせずといへども、海峡を越えて、談路に至れば鼻音流行し、更に渡りて阿波に入れば愈々同音の顯著なるを見る。南の方土佐に至れば、其音更に明かにして、此地の人は、英語の^{ng}を、ドングと響かし得ずして、ドングと響かすこと通例なり。故に鼻音畿内と南海と緣故を有する音なりといふべし。

助辭又言の中或は下にガギググゴの用ひ行はれて、其音の顯著にきこゆるは、東海、東山、兩道の諸國なり。東京近傍の東訛に、此音の耳立つは、他方の人の常に注意する所なり。而して是より北に進み、鼻音次第に力を

増し、此類の音のみならず、遂に彼の一般鼻にかかる、奥羽音とはなるなり。

本濁音ガギググゴは、拗音クワを用ひる地方に多く、又佐音に山を用ひ、波音に^ンを用ひる處にては、右兩種の音大方は共存すること、知るべし。

イとエ

越後の人、曾つて余に告げて、イロハに、エ音の四つあるを語れり。余は聽きて、始の程は、其の何の意なるか、之を解すること能はざりしが、後越後には、イとエの區別なきが故、イヰエエの四音皆同音なることを悟り、思はず之を一笑に附したことありき。かくの如く、イエに區別なきが故、言の中又下にあるヒへの、波音を失ひしものにも、區別なし。文壇に稍名を知られたる人にも、尙此誤用を免かれず。動もすれば「言へき」答ひも。

なを、書き、忽ち其生國を露はし、何にとなく鄙し氣に見えて、一も二もなく、讀者の輕蔑を受くるに至るは、誠に氣の毒の事といふべし。さて其混用の行はるゝ地、如何んと考ふるに、先づ北陸は、越前邊にも其痕迹あるが如く、それより次第に北に進み、越中越後に於て甚だしく現はれ、東山に於いては、飛驒は未だ知らず、信濃より上野下野を経て、奥羽に入り、其別韻を亂るゝに至るなり。出雲の國にても、此區別疑はしと、人の語れるをきゝたれど、自ら之を耳にせしに非ざるが故、其實否は今此處に保證し難し。伊勢の國、舊桑名の藩士にも、亦此辨あるを認められたれど、其は其地の鄉音として論するを得ざれば、此音自然の配布には關係なしといふべし。

シとス及びナとツ

シとス、ナとツの混同して、區別を立つること能はざるは、奥羽人一般の、

治すべからざる痼疾病とす。シスの假名遣の區別に、丸と結の符號あり。丸とは下を圓めたるしの字をいひ、結とは輪の形をなしたるすの字をいふ。しかして其發音をきけば、シより寧ろスの方に近きが如く、其假名遣は、スをシに誤るより、シをスに誤る方多きが如し。時には其發音明瞭ならざるより、濁音にきこゆることもあり、電信文等にては、様々の笑ふべき事、シスの誤用より生ずることありしは、余の親しく知る所なり。ナとツも、茄子苗との誤を生せしことありしは、余の親しく知る所なり。ナとツも、亦同様にして、其音ナなるか、ナエなるか、ツなるか、區別判じ難し。仙臺人の音にて、水といふときは、ミヂ、ミヂユ、ミヅ三音の間にきこゆ。清音の道すらも、亦屬々同様の濁音にきこゆるとあり。是皆畢竟母音の響かせ方、他國人と異なる所ありてに山るならんか。南部人は、英の *u* をエード、響かすこと能はずして、常にヤーの如き、奇なる音に呼ぶ。又 *i e u* の音も、

折々相混じ、加行のキケクの三字、其使用紛れ、羅行の有りと書くべき場合に、有ルと書くことなせあるは、同地の人には珍しからぬ事なり。單に奥羽といへば、其區域甚だ廣くして、細別すれば、津輕、南部、秋田、山形、仙臺、米澤、會津、福島、各々差異ありといへども、シス、チツの區別は、一般に困難なるが如し。尤も會津福島は此患に感染すること稍少かるべく、越後も北の方、新發田に至れば、既に同病に陥るを見る。出雲の人は、シスの別の困難なる、亦奥羽人に同じ、出雲音の、概して奥羽の音と符合する所多きは、祖先の移遷を探るに、大に注意すべき所なり。

以上は、發音の差異の、特に著く、其の行はるゝ區域の、最も廣きものを取
りて、分類を試みたるなりといへども、余が見聞の狭き、或は誤れるるものあ
るべく、足らざるものあるべし。其の盡さざる所多きは、素より余の自ら承
認する所なれば、只僅かに世人の熟知せる事實を挙げて、研究の方針を

示したるに過ぎず。此研究の、人類學上に及ぼす効果如何、また地方鄉
音の配布と、山脈河流の位置との關係如何、等の問題は、將來各地の人
々の、忍耐多き、精密なる探驗を待ちて、始めて解釋することを得るなり。
是より以下は、其流行地の、稍範圍の狹き郷音につき、聊か其由來及び配
布を正さん。

II、d、j、y 四音の轉換

リ音とd音とは、前脣に觸る、舌の位置同じく、息を鼻より洩らすと、口
より洩らすとの差異なれば、此兩音屢々相轉換することあり。之を吾人
が親しく知る所の漢語に徴すれば、左の如き例あるを見るなり。

男	ダン	ナン	内	ダイ	ナイ
任	ヂン	ニン	尼	ヂ	ニ
泥	ヂイ	サイ	涅	ヂツ	サイ

龍 ドウ ノウ 奴 ド

我國語には、同様の關係ありやと原めるに、聊か其證なりと思はるゝものは、退のノクを關東にてドクといひ「己」のオフレを九州にてオドレといふ類なり。助辭のニテの同化して(nite=n'ke=de) デとなるは、雅より俗に移れるなり。同様に「木の下風は塞からデ」の「デ」も、塞からヌニテより、塞からンテに移り、又「シ」を落とし、塞からテとなりしものと見ることを得べし。「かうニテアルベシ」と云ふ語も、「かうデアルベシ」と變はり、更に「デ」とアド再び融化して「ダ」となり、「シ」音を嫌ひて、「ル」は「ン」となり、「シ」は「イ」となるときは結局關東音の「おうダンベイ」となるなり。

So nite aru besi の nite は de と し なる。ka de は し なる。ru は し なる。besi は bei と なる。遂に So dattu hei と なるなり。

語尾にナビグと轉換する言あり。疑の言の中國邊にてある「おうナ」とい

ふ所を關東にある「おうダ」といふ。此のある「おうナ」は、ある「おうニヤ」より轉じたるか、或はある「おうナラン」の「ラン」を落としたるものなるべし。又諾然の義より出でたる「おうナリ」は、「おうナ」を變はり、轉じて「おうダ」となることあり。

更に進んで撥音を正せば、「d」音は、「j」音に近く、又「j」音は「y」音に近し。「d」音とは、「d」音は舌頭を前脣の歯の後の方に置くと、「j」音は舌の中部をd音の位置より、脣の稍後の方に置くとの差異に由りて、生するなり。「j」音と「y」音とは、舌の位置殆ど同じく、とは「j」に比して、稍軽く脣に接するの差あるのみ。故に關東の「おうダ」は、中國、四國、九州邊の「おう」、「デ」、「ヤ」、畿内及び其近傍の「おうヤ」となり、斯くの如く、其原音「na」より出で、「da」、「ja」、「ya」の三種に分れ来るなり。

西京にて居ナサレタを、おヤハツタをいふ。これの「y」に移り、ナよりヤ

に轉じたるなり。しかして、サをシャに變へて、其父音を落とし、又レを詰音となせば、左の如き變化となる。

itasareto を *inashareto* となし、ヨをフに替へ、を落とし、又レを詰音となせば、其結果 *iyahatta* となるなり。

山陰山陽の東部、北陸の南部にては、ぬナサレタを、ぬナハッタといふ、畿内にも亦此發音あり。是より推して考ふるときは、此語に關しては、山城の音は、此等の地方の音より轉化したものと見ることを得べし。ナは稍ニヤの氣味に響かし、後リを落とせば、自らヤに變するなり。現に他國の人の、行かないもノザヤらうといふ所を、福井邊の人は、行かないもンニヤらうといふ。此のもンニヤらうは、容易くもンヤらうに轉するなり。

生憎 あナにく あヤにく 否 イナ いや

右の類もまた、y 轉換の例なるべし。

東京にてさうデスゼといふ所を、西京にてさうドスエといふ。デスもドスも、何れもニテオハスの轉なり。畿内の中、西部、山陰、山陽の東部にては、之をダスといふ。エはゼの轉なり。セをフ音に響かすときは、ゼとエは *je* と *ye* の轉換などを知るべし。奥羽の福島、若松の地方にては、英雄をエイユウといはずして、ゼイユウといひ、雪をユキといはずして、ジユキといふ處あり。是亦同様の關係なり。

n J Y の轉換は、参考のため、左に支那語を以て示すべし。

吳音	漢音	廣東音
人 ニン (nin)	ジン (jin)	ヤン (yan)
若 ニヤク (nyak)	ジャク (jak)	エウク (yeuk)
饒 チウ (neu)	ゼウ (ieu)	イウ (yiu)
柔 ニウ (niu)	ジウ (jiu)	ヤウ (yau)

日ニナ (nit)

ジツ (iti)

ヤツ (yat)

「音

ラリルレロの音は、九州人の困難を感じする音なり。就中薩摩人に於いて、最も甚だしそす。即ち鎗をやイ、陸をチク、龍動をドンボンといふが如し。遙かに北の方會津にても、同様の困難ありて、適當に「音を響かすこと能はず。仙臺南部邊の人は、此音に捲舌を用ゐる者あるを見れば、他國人の如く、平易に響かすこと能はざるもの。如し、ラリルレロの發音は、同じく難事の如く見ゆれど、九州人と奥州人とは、自ら其癖に於いて異なる所あるなり。故に配布上より論じて、關係ありと断すること能はず。抑も我國の古音は、如何なる類の音なりしか、今得て知り難しといへども、中古以來は、此音を嫌ふに至りしと見え、動もすれば之を省けることが多い。

客	マラウセ	マウセ
皇祖	スメラミネヤ	スメミネヤ
鳥屋	ビリヤ	ビヤ
退	シリゼク	シゼク
歸	カヘルサ	カヘサ
有也	アルなり	アナリ
戲言	タハルセ	タハセ
惜	タハルセ	タハセ
心地	コロガム	コロガム
拜	コロガム	コロガム
去	サリムル	サンムル

又、音を撥音又促音にかへたる例は左の如し。

畢 件 をはりね

くだり

くだん

のこ

殘花 のこりのはな

のこ

夜御殿 よルのねど

のこ

可有 あルベカルめり

のこ

欲 ほりす

のこ

則 のりどる

のこ

古書に讃良のさらら、平郡のへぐり、駿河のすルがの如く、支那のロを、我國のリに當てたるを見ても、其リ音の強からざりしを推し得べし。
 「を避嫌ふは、啻に九州奥羽の人のみならず、諸國一般多少其傾向あり。平常用慣れて、絶えず眼前にあるものは、却て人の心附かざるもの多かるべし。今左に普通使用の語を出だし、其例を示さん。

と乙ロ

と乙

こロげる

と乙

れはいリなさレ

れはいンなさイ

とリだす

とンだす

とさります

とさイ

とさンす

とさツス

けレセ

けセ

けンド

けツド

れくレなさレ

れくシなさイ

そレなら

さうであルげな

れもひなルなよ

おもひなンなよ

ヤルまい

ヤンめい

アルベー

アンベイ

ナラない

ナンねい

ミリかゝる

ミツかゝる

ヤリつける

ヤツつける

此外「音を捨てたるもの、中に、次の如き例あり、

わレミモ

ワイミン

わレら

ワイラ

くレば(來)

クエバ

「音を避けて、擬音又促音に變ふる癖は、最も關東奥羽に多くして、殊に

耳立ちてきこゆ。

地方に由りては、「を慈々とに轉用することあり。これ畿内にて屢々耳にする所なり。和田をソラ、談判をランバンといふが如し。北陸は未だ知らずといへども、佐渡の人には同病あるなり。

s 音

佐行の父音は、母音のイと結合ときは、屢々脱落つることあり。是も亦古以來の癖なり。左に數例を示さん。

朝

あシた

あイタ

響應

もてなシ

もてなイ

申

くシ

くイ

況

まシて

まイテ

現出

あらはシだシて

わらはイだイテ

此用法、足利時代の頃頻りに流行せしと見え、能狂言には常用の音なり。現今諸國に行はるゝものより、二三の例を舉ぐれば次の如し。

塞

さむシ

遠

とほシ

私

わたシ

私共

わシセモ

擇

拿をさシて行く

詠

はなシて來る

擇

はなイて來る

長州邊の人は、多シといふ言のシを、イにかぶるのみならず、ホの字をもイに詠り、ホイ、といふ是は中の音の下音に引かれたるなり。
さて以上述べたるが如く、シをイといふ癖は、諸方に散見すれば、されど、此類の言は、悉く然かすといふにはあらずして、言に由りては、替ふるもの

あり、替へざるものあり、其上又地方に由りて、用法の異なる處なるあるが故、其配布にかゝはりては、定則を立て難し。

又シをヒと轉換することあり、即ち七のシちをヒちといひ、人のヒとをシと、いふが如し、余はヒをシに誤るは、東京邊のみの特殊の音なりと考へ居りしが、今其の然らざるを悟れり、山陰山陽の東部、四國の愛媛邊にても、人をシと、額をシたひなを、呼ふ風あり、只東京は、此等の諸國に比し、此癖の最も甚だしきのみ、之に加へて事の偶然に出でたるかは知らざれど、ヒをシに誤る地方にては、シをヒに誤る癖あり、十七をヒふヒ、質屋をヒちやといふが如し、是はヒのヒに替はりたるなるべし、總じてシのイとなるは、ShiのHiとなり、而して後又ヒとなりたるものと見て可なるべし。

ト音の其母音オを落とすことにつき聊か心付けることあり、左に之を示す。

なんのことぢや

なんのことだ

なんのことぢや
なんのことだ

右の如く、ト音オを落として、促音となるときは、下の字の濁音を清音に替へ、濁音となるときは、濁音は其儘にして用ゐるなり、是は餘り些細の事にして、發音變化の配布には、價値或は少かるべし。

畿内にては、オの母韻を延ばして、處のトコロをトコロー、京都府のキヤウトフをキヤウトーフなぞ、響かす地方あり。

ト音につき因みに記す。加賀人のト(格別助辞のト)は、tuoを早く、口の内にていふが如き、一種異様の音にきこゆ。其範圍は、何れの地方にまで及ぶや、尙調査を要す。

チ、ツ、ヂ、ヅノ音

チナツテトは、父音一定の規則に従へば、其母音のアイウエオと結ぶとsu ta, ti, tu, te, toと響くを正當^レす。チツの二音、今の如く chi, tsuと響くは、恐らくは變音なるべし。是と同じく、ダヂヅヂドに屬する jii, dzu と、其原音は diju なりしならん。今、ツ音は、tsa, t-i, tsu, tse, tsoの tsuにして、關東俗語のトックアン(第様)の ts'a や ツソコナフ(失敗)の tsu^レ 同類の音なり。ツは引キ掘エル即ち hikisueru の k の促音となりて、t に變はり、下の su を結びて、ヒカツサル^レ 離す hittsueu^レ なりたる時の tsu に同じ。ナは羅馬字に tschi と書け、tsiと書くも左まで、我本音に遠しと云ふにはあらず、引キ締メルを詰めてヒツチヌル即ち hittsimeru 或は hittsimeru^レ と云ふと、tsi又 chi の音なり。

今の大ツ、ヂ、ヅの原音は、ti, tu, di, du なりと云ふは、往昔我言語を表はすに

用るたる漢字の音を原ぬれば、證左と爲すべき事實ありといへる事の煩難に亘るを避け、其は別に論すべし。

ヂヅミシズ

ムヂ(藤)とムジ(富士)、ものヅキ(物着)とものズキ(物好)を混同するは、我本島一般の通病なり。獨り九州四國には、此患を感せざる地多し。此區別の我國の南部にのみ存するは奇なりといふべし。土佐人のじは動もすれば、じに紛る。故に市は屢々じにきてゆ。それヂヅの古音を探るに注意すべき點なりとす。

ク音

格子のかクしをかクし、朝日のつキたちをつイたちといふが如く、ク音の屢々脱落つるは、人の親しく知る所なり。今形狀言のクの音に就いて正すに、東海、東山の中部、及び北部にては、其儘に用ひれど、畿内及び中國

にては、クを落とすを常とす。

關東

關西

善	よク	よウ
塞	さむクテ	さむウテ
白	しろク見ゆる	しろウ見ゆる
美	うつくしク飾る	うつくしウ飾る
涉	はかばかしク進まぬ	はかばかしウ進まぬ
關東	ても下に御坐の字のあるときは、クを落とすとあります。	
宜	よろしウござる	
強	つよウござります	

形狀言のクの、ク音を落とすと、落とさうるとは、細別すれば、其範圍何れの國までに及ぶや、尙後日の探求を要す。北陸には、以上の場合に、クを落

とす地方多し。

W 音

ワヰウエヲの、昔は皆 w 音なりしは、今更言ふまでのことにある。漢字を以て、我音を記し、其當時は、其音明白なりしが、何時の頃よりか、次第に變化し、遂に今日の如く、ワを除く外は、和行の音は、阿行の音と混するに至れり。然れども、是は我國全體悉く然りといふにはあらず。この w 音、尚青森縣には存するが如し。山陰の西部にも、現に、此音ありときく。九州と北陸の人には、未だ就いて正したることあらざれど、或は之あるかも知るべからず。

ユビヨ

ユビヨの混同は、越後地方にのみ、特別なりや、將た他所にも、これありや、是も亦研究を要す。ユふべビヨんべの轉化は、古くより見る所なるのみ。

ならず、今も尚諸方に於いて耳にする所なり。

ユビヨの混同のみならず、越後には、オーをウーと響かす癖ある地方あり。

イ 音

我イ音は、其響弱くして短きが故、西洋人の羅馬字に由りて、此音を響かすどき、我國人には、一種異様にきこゆることあり、即ち人を軽くヒトといふこと能はずして、ヒートの如く呼び、神をカミといふこと能はずして、折々カヌといふが如し。

此音輕きが故、古來イは左の例の如く、父音を添へて、共に脱落つることあり。

柳瀬

やなせ

時切

ときぎれ

やなせ

足立 わンだち

シカ

あだち

鹿

カ

連 はチナ

ハス

口解 くチミキ

くミキ

壇生 はニム

ハム

隼人 はヤヒ

ハヤ

網引 あミビギ

アビギ

覗 すミスリ

スリ

白髪 しらかミ

シラガ

鳥屋 ピリヤ

ピリヤ

白髪 どや

ドヤ

の異なりて、言語も之に從ふに由りてなるべし。(爰に關西と記するは、重に畿内をいふ。山陰山陽の諸國は畿内と同類なり)此場合に、關西は延音を用ひ、關東は促音を用ひる。

原語

關西

關東

買

かヒテ

カウテ

カツテ

救

すくヒテ

スクリウテ

スクリツテ

誓

ちかヒテ

チカラウテ

チカラツテ

習

ならヒテ

ナラウテ

ナラツテ

拂

はらヒテ

ハラウテ

ハラツテ

問ひては、關東にて、文語にて問ひてといへど、談話にては此語を用ひぬ。越後長岡の人は、買とては、かアてと響かす。

關東にては、他の諸國にて、文字の體にて發音する語を、イ音を取りて促

音にかふるとあり。

四十一

攝裂	かきはく	かツつあく
打敵	うちたいく	ウツたいく
追撃	オヒかくる	オツかくる
乘越	のりこす	のツこす

又同地方にて、イ音の父音と共に落ちたる場所に、ンの音を用ゐるとあり。

劈	ひきさく	つんさく
差出	さしだす	サンだす
打擲	ふチなぐる	ハンなぐる
逐出	れヒだす	れンだす

麻行の父音と結びたる、イの落つたときは、其下の字に濁音を附するを、

諸國共に通則とす。

醉漢	のミたくれ	のンだくれ
組解	くミつほぐれつ	くンづほぐれつ
讃	よミて	よンで
波行の濁音	ビターンに替はると麻行のミの如し。	
飛	ヒビテ	ヒンで
悦	ヨロコビテ	ヨロコンで
奈行のニ	も又ンに替はることあり。	
往	いニテ	いンで
死	しニテ	しンで

羅行のリの促音又撮音となるは、「音の下にて論じたれば、今爰に説かず。此中借の字、畿内中國にては、かツてといひ、關東には、かりてといふ。是

は通例の規則に反対したる奇なる例外なり。

四十二

エイ音

清明禮の音は九州にては、セイ、メイ、レイと、其下の音を字の示すが如くイ音に呼べど、他の諸國にては、多くセー、メー、レーと、エを延ばしたる者に呼ぶ是大に注意すべき點なりとす。

アイ音

此音は地方に隨ひ、種々の音にきこゆ。中國の三備にては、大會のダイクワイを、デエーケエー(*de-ke-ke*)の如く響かす。九州熊本邊にも、亦類似のケエー音あり。名古屋邊にも、之に似たる特種の音あり。名古屋人の音は、其後の方エーより寧ろヤーにきこゆ。即ち早のハヤイをハヤー(*haya*)、苦のニガイをニギヤー(*ngaya*)といふが如し。東京にては、ハヤイをハエイ(*hayai*)、大根のダイコンをダイコ(*deiko*)といふ。相模邊にては、早のハヤをヘー(*hey*)。

前のマヘをメー(*mye*)といふと、岡山音に似たれど、之に比すれば稍短かし。加賀越前の邊にては、サウカイをサウケと、口早にて短かくいふ。此等のアイの變化したる諸音、皆異なる所あれど、之を表はすべき適當の法なし。

以上に列記したるが如く、地方地方の發音を探り、其變化を正し行かば、殆ど底止する所なかるべし。今若し大地圖を描き、其上に種々の色取を以て、發音變化の配布を分ち行かば、或は意外の結果を生じ、竟には我祖先の移遷及び交通の迹を探り得るに至るべし。これ余が此學研究の大目的とす。余が不完全の材料を以て、臆測するも、發音上、山陰より北陸を経て、奥羽の西部に至れる種族と、山陽畿内に移れる種族と、濃尾參遠の地を経て、關東より奥羽に入れる種族とは、三大別を爲し居れるが如し。將來我歴史の研究に對する豊富の材料、此方面に存するなり。

撥音と促音

我が大和語の一の特徴として見るべきは、其言は、續りの上中下を問はず、皆母韻にて終ることなり。故に古ヘ支那音を借りて我音を寫すに當り、其撥音と促音とを以て、我平音を表はすを常とせり。支那語に三類の撥音促音あり。舌内音、唇内音、喉内音これなり。此三類と我假名と對照せば、舌内撥音けニタ、同促音はナツ、唇内撥音ミム、同促音はフ、喉内撥音はイウ、同促音はキクなること、通例の用法なり。之を英字にて表はせば、舌内撥音はリ、同促音はテ、唇内撥音はム、同促音はピ、喉内撥音はミ、同促音はエなり。左に我古書に載せたる地名を擧げて、假名の用法を示すべし。

舌内撥音

因幡	イナバ (in bō)
難波	ナニハ (nan pa)
謁敍	アチエ (at ye)

舌内促音

謙肢 サヌキ (san ki)
雲飛 ウチビ (wan fi)

青伐 ハイホツ (hai hot)
オトクニ (ot kun)

此舌音轉じて羅行のヲナルシなる
信夫 シノブ (sin vu)

乙訓 オトクニ (ot kun)

廣良 サラム (isan lang)
平郡 ヘグリ (peng guu)

駿河 スルガ (swun ha)

喉内撥音

男信 ナマシナ (nam sin)	爰甲 アユカハ (ai kap)
矣談 ミタム (mi tam)	揖保 イビホ (ip po)
甘樂 カムラ (kam lak)	揖宿 イフスキ (ip shuk)
南佐 ナメサ (nam tsu)	

喉内促音

惠唇 エドモ (wei dum)	邑知 オボチ (ob chi)
喉内撥音	喉内促音
相馬 サウマ (saung ma)	安宅 アタカ (an tak)
英多 アガタ (ang ta)	佐伯 サヘキ (sa pyak)
久良 クラギ (ku lang)	託馬 ツクマ (tak ma)
餘綫 ヨロギ (yo lung)	
伊香 イカヨ (i hang)	

喉内撥音シタの、ガヤゴ等に利用せられたるを見れば、和名抄著述の頃には、其撥音の痕迹を留め居りたるは明かなり。此音ギより轉じてイに變はるものあり。

當麻 タイマ (taug ma) 英多 アイタ (ang ta)
此喉音其勢絶えんとして、下の言の頭に、其濁音を譲る例あり。

芳賀 ハガ (Haga) 養父 ャブ (Yangfu)

撮音促音は、すべて何れの類を問はず、屢々省略せられて用ゐらるゝことあり。

安房 アハ (Aha) (Bara) 能登 ノト (Noto) (Sueki)

寧樂 ナラ (Nara) (Bara) 甲斐 カヒ (Kai)

多少の異例なきにあらざれど、古は漢字借音の用法概して定まり居りたるが、何時の頃よりか、喉内音のン^ク即ちngは、忘却せられて、之に當てるウとイとのみ残り、又舌内音のル^ミ、唇内音のム^ルも出で來りしが、此舌唇の兩音も、後には相混じ、最初にはル^ミに當て、作られたるンの假名も、後には區別なく、ル^ミとム^ルとに代用するに至れり。

喉内撮音のン^クなりしは、今は遍く人の知る所なるべきが、唯怪しみ、數年前余が之を述べしまでは、世間之に心付きたる者なかりしが如きを。

本居氏の漢字三音考を見るに、頗りに我國の音の清朗なるを稱揚し、支那音を侏離缺舌なりとして排斥し、喉内撮音を以て、古音はウなりと断定し、支那音は混沌にして鼻にかゝり、後世の唐音などにては、ウをンに響かし誤るに至りたりとて、甚しく之を鄙下し我假名に寫したるウこそ、其原音なれどて、得意の論辯の記載あれど、是は誠に最負の引倒しにて、一種偏見の愛國論に類する、れ國自慢は、却て其弱點を暴露するに當るなり、原音は決してウにあらず、支那のン^クに對し寫すに適當の字なく、策窮りて、已むを得ず、ウを當てたるに過ぎず、三音考に左の一節あり、或人云東の字漢音ト^ンなるを、此方にてトウとするは、ンの綴字未だ出來ざりし前に、ウをンに借りて、トウとつけたるなり、然ると、今トヲと呼ぶは誤なりと云へり、此說トウを今トヲと呼ぶを誤なりと云ふは、あることなれど、ンにウを借りてつけたりと云ふは非なり、若し然らば、

るをや、凡て今の唐音を正しきものと心得るから、如此きひがことを
喜ぶなり。

これ全くンとンクの區別を辨へざるより、此謬説に陥りたるなり。本居
氏が時代は、音韻の穿鑿に、其材料の不完全なりし時代なれば、此謬説あ
る、收て深く答ひるに足らず。今より見れば、此の如き區別は、少し斯達の
研究に心ある者は、容易く見出だし得べきものなるを。

唐音なりとて、ンク音のクの失せたるにあらず。實は其聲の隱微なりし
より、ンクをンに代へて寫したるまでなり。行燈をアンドン、音韻をフシ
ン、鈴をリン、狹をチンと書く類、即ちこれなり。尤も現今支那の南方に於
いては、ngをリに、又反對にリをngに代ふる地方なきにあらず。

漢吳音圖の著者、太田全齋氏は、綿密なる考證の後、風の字、通雜に山西人

郷語讀むと分の如しとあり、又封の字、枕草紙に、紫の紙を包みてふんじ
てとあるより、仄かにウのンに通するを悟り、其上唐音にても、ウはンと
なるより、喉内音を左の如く定めき。

東冬江陽唐廉耕の轉の字、ウの韻なれど、清音蒸の韻には、イの韻もま
ヒり、又唐韻は、ンの韻なり。因て此轉のウの韻は、イと、ンに通ムウ也。
唐音にても、イは、ンなり。古ヘイの假名にて止めたるは、インクの如き、引
きて撥ねたる音の、寫しがたくして、ンクを取りたるまでなり。即ち京の
字の音、ケインクの如く響きたるを、ケイと寫したるが如し。これ太田氏
の未だ考へ及ばざりし所なり。

太田氏の考證の學力は、實に敬服の外なし。一々文字につき、古書の用法
を示し、忽にする所なきは、力めたりといふべし。今左に漢吳音圖徵より、
喉内音に屬する、文字の數例を取り、氏が研究の結果を示すべし。

〔萬葉集〕鐘禮シグレ・如今小盃をチヨクとよふは即ち鍾の字なり。

〔延喜式〕雙栗神社傍假字サグリ、栗は字音を用ひたり、訓にあらず。

〔和名抄〕雙六、俗云、獨久呂久。

當〔萬葉集〕山川之當都心(タヤフコ、ロ)大和の當麻、タギマ(古事記當

較麻)

岩〔和名抄〕岩野(伊勢郡)多木乃、愛岩(山城郡)於多岐

相〔和名抄〕相模、佐加三、相樂(山城郡)佐加良加。

香〔和名抄〕伊香(近江郡)伊加古、香美(土佐郡)加々美。

養〔延喜式〕養布神社(倭假字)ナギフ。

斯くまで考證行届きたれど、只單にウをグに用ひたるは、香山をカグヤ

マといふ例なセヽのみ説きて、一步を進めて、ウはングに當てたる假名
なるが故、ガヤグゲゴに轉するなりと、斷言することを得ざりしは、恰も

船の港口に近づき、猶雲霧に迷られて、上陸すること能はざるが如き觀
あり、事甚だ惜しむに堪へたり。

我古書の用法に、地名人名、物名等に、漢字のシグ音を利用したるは、其例
多けれど、余が狹識なる人の末だ此點に論及せし者ありしを聞かず。ウ
のシグなりしは、擬聲文字の例も亦之を示す。

大雨滂沱ハウダ又ホウダにあらず。パンタタ又ボンタタにて、バタ
バタ又ボタボタの義なり。

鐵中鈴々サウサウにあらず。金の聲のチヤンタチヤンタなり。

伐木丁々丁、吳音チャウ、古音なり。丁々ハ斧の聲のチヤンタチヤン
タなり。丁ハ竹耕反どあるより、タウと讀むは、我五十音に混みて、支
那の反切法を解せざるなり。又丁音爭であるより、丁をサウと讀む
は、甚だしき誤讀なり。争は原音チヤンタに近しと知るべし。

ンクなり。即ちドンドンの音なり。

蟲飛薨を コウコウにあらず、ホンクホンクなり。即ち飛跳ぬる音なり。

諸聲字の組織も亦之を證す。

鐘 シヨウ、本音ナヨンク、其聲我方にて、ナヤンといふと相類す。

釘 吳音ナヤウ、ナヤンク、ナヤンクの聲に象りたるなり。

筆 ナウ、本音ツヤンク又ナヤンクなり。

蜂 吳音フ、即ちフンクにて、其羽のブンブンの音なり。

鶯 アウ、喫々のアウアウ、即チアンクアンクの聲に叶ふ。

此鳥の聲綿漫ともきこのゆを見ゆ。鶯は黃鳥にて、我國のウグヒスにあらず。

斯く稍細かに、喉内撮音につき述べ來りしは、其の既に忘却せられたる原音に關し、世人の注意を促すに過ぎざるのみ。

さて我國にて、撮音促音は、如何にして現はれ來りしものなるか、本邦言語の自然の變化に基きて、しかる現象の出で來りしか、或は支那朝鮮の交通に由り、外國語の誠化を被りしに基けるか、又或は奈良朝より平安朝に至り、文化大に開け行き、四方の人相雜居し、相往來したるに由り、音聲の上に影響を及ぼし、其結果として、生じ來りたるものなるか、未だ詳かにする能はずといへども、其頃の文書より、次第に撮音促音の使用を見るに至りたるは、明かなる事實なりとす。當時漢語の韻尾を寫すに、ニ、ヌ、ミ、ム、ナ、ツ、フ、キ、ク等の假名を用ひたれど、實際は之を撮音促音に書かし居りたると、或はありたるなるべし。

現今の畿内音を以て、關東音に比するに、畿内は平坦にして母韻多く、尚

古代の大和語の痕迹を留むれど、關東は凹凸にして、撥音促音を以て満たる。其音調粗野にきこゆるも是に由るなり。九州は多く喉内音を用ひ、重苦しくして雅ならず。特に促音勝にて、大和語の發音に適せず。關東九州共に大和語自然の發生地とは見做しがたし。想ふに、往古此等諸方の種族は、大和民族の征伐を受け、遂に之に服從して、固有の言語を捨て、大和語を採用したるにあらざるか。現今其地方の住者の、撥音促音多き、不自然の音を以て、大和語をあやつるは、蓋し其祖先を異にしたるに由るなるべし。九州に古言の殘存するとあるは人の知る所なれど、其は太和人種の傳へ残したものと、假想するとを得べければ、敢て奇とするに足らざるなり。以上は固より學理に基づきたる考説にあらず。事餘りに大膽に過ぐれど、只余が腦頭に浮かみ出づる所の想像を記したるにて、古代の種族熊襲、八十島帥に仄かに想を寄せたるのみ。

鬼にも角にも、諸方の人々の雜居交通は、音聲の變化に大影響を與へたるべきは、疑ふまでもなし。撥音促音の此雜交に由りて、勢を得、其流行の區域を擴むるに至りたりと思考するは、決して不當の推測にあらざるべし。撥音の最も勢あるはリ(ン)なり。^{ng}シ(ン)は、言の下には現はるゝとなけれど、言の中には、半濁音として、夙くより生じたるもの、如し、昔し漢字を假名に寫し、時、相のサン^ク(sang)を相模に當て、義のナン^ク(nang)を以て、美濃に當てたるは、本濁^gのサガミ、ミナギにあらずして、半濁^{ng}のサガミ、ミナギなりしにはあらざりしか、若し然りしとせば、京音も既に東方音の感化を受け居りたるに似たり。元來、鼻聲は東方音の特徴なり、其脈南に少くして、北に進むに従ひ、現はるゝと次第に多く、奥羽に至れば、最も甚だしきを覺ゆるなり。今濁音のガギグ、ゲゴに由りて微するに、九州及び中國の西部は本濁なり、中國の東部畿内、東海、東山兩道の大

部分は、其音の高の中或は下にあるときは、半濁の昭那ちがゼググゴなり。此昭那ちンク音は、鼻音の痕迹を残はせるなり。南方の清音も、北方に至れば、濁音又半濁音に變するとあり。例へば行くの音、大阪京都邊にては、ユク又イクにて、クは清音なり。東京邊にては、清音もあれど、多くはイグにて、其グは本濁音なり。柄木より福島邊に至れば、既にイグにて、グは半濁のンク音なり。此に至りて、奥羽の鼻聲現はれ出づるなり。

抑も我撮音の性質を考ふるに、其勢甚だ強く、しばしば他音を壓して、或は之を脱落せしむることあり、或は之を融化せしめて、我方に引き付くことあり、或は之を我結合に便なる音に轉化せしむることあり。今左に種々の場合を示すべし。

他音融化の例

彼様 アノヤウナル (anoyōnaru)

アンナ (anna)

母韻脱落の例

色々 イロイロナル (iroironaru)

イロンナ (irona)

冒々 ウマウマト (umamato)

マンマト (mamato)

アナタ (anata)

アンタ (anta) + 方

兄様 アニサヌ (anisana)

アンサヌ (anean) 裏羽

ナニト (nani to)

ナント (nanto)

イヅタニツ (izukunizo)

イツクニツ (izukunizo)

チモゴロ (nemegoro)

チンゴロ (neagoro)

ドノ (done)

ドン (don)

カムガフル (kamugaru)

カンガフル (kangaru)

イヌノン (inuroko)

インノン (inoko)

右の如き母韻脱落の如クナの清音を更ぐて、濁音に化せしむること多

齋	カミサシ (kamisashi)	カナザシ (kanzashi)
紙製縄	カミサキヨリ (kamisekiyori)	カツメヨリ (katzemeyori)
公達	キミタチ (kimitachi)	キンドウ (kindachi)
疋手	ヨミテ (yomite)	ヨンド (yonde)
躋張	フミハル (fumiharu)	フンバク (funbaru)
紙袋	カミフクロ (kamifukuro)	カムタヘロ (kambukuro)
何程	ナリホド (narihodo)	ナムロ (nambo)
東	ヒムカシ (himukashi)	ヒンガシ (hingashii)
諸	ソラニヌ (soraninu)	ソラニヌ (soraninu)
就中	ナカニハタ (nakanihata)	ナカニハタ (nakandzukuri)
汝	ナムチ (namuchi)	ナヌ (nanji)

無止事、ヤムコトナキ (yamukotonaki) ヤムコトナキ (yamukotonaki)
他音を撥音に變ずる例。

羅行の音は其下に奈行或は麻行の音ある。又は、撥音となる。是は、の
發音稍々困難なるより、下のコ感は、の而も付けて落したるなり。

如件	クダリノヒトシ (kudarihogotoshi)	クダリノヒトシ (kudarihogotoshi)
垂	ナリナントス (narinantosu)	ナントス (nannantosu)
暁	ヲハリヌ (owarinu)	ヲハヌ (owannu)
盛	サカリナリ (sakarinari)	サカナリナリ (sakannari)
夜御殿	ヨルノオトヲ (yoruoototo)	ヨムノオトヲ (yomoototo)
有	アルヌ (arumeri)	アンヌ (anumeri)
其	ソレナリ (sorenara)	ソンナリ (sonnari)
勿爲	ナサルナ (nasaruna)	ナサンナ (nasanna)

右の場合に下を濁音に變へて軟聲となしたる例もあり。

無^レ標 *ヨリトコロナキ* (yoritokoronaki) *ヨドコロナキ* (yodokoronski)
無^レ取手 *トリテヤナキ* (toritemonaki) *トナテヤナキ* (tondemonaki)

乍^レ併 *ケンヌ* (keredo) *ケンヌ* (kendo)

泥^レ龜 *ドロカメ* (dorekame) *ドンガメ* (dongame)

波行の音は、清濁共に撥音に變はることあり。此場合に下の音濁音となるを當とす。唇音調和のため、上に四音ある例 *モモハカル* のモをPにかへるこあるあり。

間屋 *トヒヤ* (tohiya)

トヒヤ (tongyu)

惟 *オモヒムク* (omohimru)

オモヒムク (omomimru)

盧 *オモヒバカラ* (omohibakaru)

オモンバカル (omompakaru)

顔 *カホハセ* (kaloahase)

カンバセ (kambase)

殆 *ホトホト* (hotohoto)

ホトト (hotondo)

主水 *モヒトリ* (mohitori)

モトリ (mondo)

藏人 *クラヒト* (kurahito)

クランヌ (kurando)

延氣 *ノビキ* (nobiki)

ノンキ (nonki)

呼來 *ヨビテクル* (yobitekuru)

ヨンデクル (yondekuru)

右羅行波行二類の外、尚撥音に化せられて、其音の變はるるのを。

攝取 *カヂトリ* (kajitor)

カンドリ (kandori)

馨 *カグバンキ* (kaguwashiki)

カンバンキ (kambashiki)

輕 *カロクスル* (karokusuru)

カロンズル (karonzuru)

疎 *ウトクスル* (utokusuru)

ウトンズル (utonzuru)

勞 *ツキサク* (tsukisaku)

ツンザク (tsunzaku)

差出 *サシダス* (sashidasu)

サンダス (sandasu)

打擗 ブチナグル (buchinaguru) ブンナグル (buninaguru)

我國人の撥音を好むこと、以上の例の如し、關東人、奥羽人の俗語につき、尙細かに探究せば、其音に屬する言の數の、許多なるに驚くべし、腹が立ツは、腹ン立ツ(ガは ^な何)何ノ事ダは、何ノコング、上ガレは、アンガレ、鬼は、ウンサギ、成ラナイは、ナンチイときこゆるが如き、其類の多き數ふるに進あらず。

單に語勢を助くるがためのみに、撥音の多く用るらるゝを見ても、其の大に本邦の人々に歓迎せらるゝを知るべし。

眞中	マナカ	マンナカ
飽	カナ	カンナ
眞圓	ママル	マンマル
餘	アマリ	アンマリ

獸	ダマ	ダンマリ
裸	カジキ	カンジキ
止後	トシリ	ドンシリ
下	クダリ	クンダリ
爺	ヂヤ	ヂンヂイ
婆	バヤ	バンバア
雄鳥	ヲトリ	ヲンセリ
雌鳥	メトツ	メンドリ
度	ナド	ナンド
既	スデニ	スンデニ
度	トビ	トンビ
既	タビ	タンビ

夜

ヨベ

ヨンベ

六十六

赤坊

アカバウ

アカンバウ

黒坊

クロバウ

クロンバウ

青藏

アラザウ

アランザウ

言

イハヤ

イハンバ

書

ヨシ

ヨシンバ

普通人の心付かざる所なれど、我言語に、軟聲を下に用る、清音を濁音に變ふる癖あるは、またンの音と好むと同様の趣味にて、其傾向の萌芽を見るも不可なる所なかるべし。

卷紙

マキカミ

マキガミ

小島

マシマ

マジマ

火箸

ヒハシ

ヒバン

山鳥

ヤマトリ

ヤマドリ

促音の方は、何れの時代より盛んに行はれ始めたるか、未だ知らずといへども、是は撥音の入聲なれば、其と同時に出で來りたりとするも、敢て奇とするに足らず。促音は早き頃より漢文の讀方には、用ひられ居りたるが如し。此音東國九州流行の音なり。

促音となるは硬聲タ(タ)ツ(ツ)ズ(ズ)の三種なり。何れにもツの字を用ゐる慣例なれど、其は理に合はず。本居氏は、漢字三音考に於て、入聲の促音に、ソの符號を使用せり。これ甚だ善し。ソをn mの兩撥音に用ひるが如く、余はソをよしP三類の促音に用ひるべし。

促音とは、兩字相重なるとき、下の字の音に引かれて、上の字、母韻を失ひ、是がために、促まりたる音といふなり。しかして、其の最も落ち易き母韻は、ウトイとなり。これこの兩母韻の響の、弱きに由るなり。上下共に同じ

父音なるときは單に母韻を落とし黙なる父音なるときは母韻を落とすのみならず下の父音に引き付けて上の父音を化せしむるを常とす。

又語勢に由りて兩父音共に變化するをあり。
同父促音の例。

勝手	カツチ (katsute)	カツチ (kattsu)
突懸	ツキカタル (tsukikakuru)	ツッカタル (tsukkakuru)

異父促音の例。

切先	キリサキ (kirisaki)	キリサキ (kissaki)
引斬	ヒキチギル (hikichigiru)	ヒッキチギル (hitchigiru)
逐懸	オヒカタル (oikakuru)	オッカタル (okkakuru)
打殺	ブチコロバ (buchikorosu)	ブッコロバ (bukkorosu)

兩父発形促音。

引張	ヒキハル (hikiharu)	ヒッパル (hipparu)
撒裂	カキサク (kakisaku)	カッサク (kakkaku)
ウの母韻の落つるは漢語の促音に多し。		
北海	ホクカイ (hokkai)	ホッカイ (hokkai)
雜誌	ザツシ (zatsushi)	ザッシ (zashi)
鐵砲	テツハウ (tetsuhō)	テツハウ (teppō)
合羽	カフハ (kafusa)	カッハ (kappa)

稀には俗語にオの母韻の落つる例あり。

蓑様	トトサン (totosan)	トッサン (tottsan)
事也	コトダ (kotoda)	コッタ (kotta)

語勢を助くるがために父音を添へ促音の形にて發音すること多し。

専

モハラ

モサハラ

サト

最

モトモ

モトモ

德利

トクリ

トクリ

判然

ハキト

ハツキリト

櫻樓

ボロキレ

ハツキリト

矢張

ヤハラ

ヤツバリ

確

シカト

シカト

澤山

ドサリ

ドサリ

關聯にて長く引く音に對し、關東にて促音を用ゐること常なり。

笑

ワラフテ

ワラフテ

父様

オトウサン

オトウサン

母様

オカアサン

オカアサン

オツカは、タの方の促音を、上のオの方に移したるなり。

關西の撥音、關東の促音となることあり。

坊

ポンサン

ボツナヤン

南天のナンテンを、東京にてナルテンといひ、京都にてナツテンといふは、前例の反対に似たる奇なる變化なり。

現今之本邦語には、撥音促音の勢力、此の如く大なり。將來東京を以て、文學の中心となし、其關東音、全國に傳播するに至らば、愈々其勢力の増加を見るに至るべし。我國發音轉化の經歷を研究せんとする者は、深く此に注意すべき所なりとす。

明治三十年四月草す

音便の説

音便とは音轉の義にて、其假名遣には、原音の假名を取らずして、轉じたる音の假名を用ゐるを常とす。音便の主なるものは、よ音便、フ音便、ヰ音便、ヰ音便なり。

よ音便

加行の父音 k は、口を開き、舌の後部を上げ、息を上唇に觸れしめて、出だす音なり。我 k 音は、獨逸語、支那語の如く、強きにあらず。然れども、此 k は歐洲語などの如く、脱落つることあり。これ舌の後部を上ぐる勞を省くより、勝音自然に喉音に變じ、母韻のみ響くに至るなり。此音便、ウ(ヨ)とイ(ヰ)に多きは、ウ(ヨ)の兩母韻は、其力弱く、口内の中部又前部にて、輕く響き、他の者の後に来るとき、自ら父音のウ(ヨ)と併はずして、相應るゝに由

るなり。假名遣の諸書に、カウアル(冠)をカ・アルの、k略の音便と爲すは、余は取らず、是はカブルの長聲音便なるべし。

格子	カクシ (kakushi)	カウシ (kaushi)
冊子	サクシ (sakushi)	サウシ (saushi)
雹	ヒヤク (hyaku)	ヒヤウ (hyau)
早	ハヤク (hayaku)	ハヤウ (hayau)
朔日	ツキタチ (tsukitachi)	ツイタチ (tsuitachi)
刃	ヤキバ (yakiba)	ヤイバ (yaiba)
於	オキテ (okite)	オイテ (oite)
呵責	サキナム (sakinamu)	サイナム (sainamu)
f 音便		h 音便

古々波行の父音は、唇音にして、今の如き母音にゆるゆるし證わり、此唇

音 w(ウ)に近かゝりしと見え、今も言の中或は下にありて、ア又オの母音を伴ふ時、ワ又ヲの音を紛ふとあり、而して此ウ音は、純粹なる合唇の w にもあらず、又開口にて發する母音の、u にもあらずして、輕き口内の音なりしが如し。此唇音又鼻聲に通ひて、ヰヒト(主水)をモンドードヒヤ(問屋)をトンヤヒトふが如く、ヨ(ン)と轉するとあり。これフヨリウとなり、更に又ンとなるなり。其の口内のウに變せんとする時、其下に来る母音を引きつけて、之に同化せしむる、とあら、之を f の音便と唱ぶ。

皮茸	カハタケ (kahatake)	カウタケ (kauteke)
筈	ハ・キ (fafaki)	ハウキ (fauki)
妹	イモヒト (imofito)	イモヒト (imuto)
兄	セヒト (sefito)	セウト (seuto)
間面	トヒテ (tofite)	トウテ (toute)

候 ナフラフ (safurafu) サウラフ (saurafu)

事 ツカヘマツル (tsukahematsu) ツカウマツル (tsukaumatsu) ホウ (fou)

類 ホ・ (fofo)

フは實は半唇音なれば適當の記號にはあらず。只假に我波行の唇音に當て、用ひたるのみ。其音便となる場合は、フを記する方、寧ろ宜しかるべし。

近世に至り、何時の頃よりか、口を開ひて、ハッフヘホを唱ふるに至り、フを除くの外は、勝音と變じ、始めてヒ音となりて、稍k音に近づき來り、遂にヒの如く母韻のみを遺して、脱落つるに至れるなり。只異なる所は、我ヒはヒの如き強き勝音にあらず、而して其發音嚴正ならぬるも、他の音の後に隨ひては、弱母のウ(ヨ)ベ(イ)のみならず、オ(オ)ヌ(ニ)も離れて、失去るとあり。獨りアの母韻は其開口に聊か勢を要するが故、他の音に接し差支わるべく當なし。然るに左の例の如きは、上方のみを用ひて、アの

方を許さず。

幸 サイハフ (saibahu)	サイワフ (saiwai)
アフギ (afugi)	アウギ (augi)
扇 ウグヒス (uguhisu)	ウグイス (uguisu)
鶯 イイ (ihi)	イエ (ie)
家 ルホリ (whori)	トオリ (toori)
通	音便は平安朝の古法なれば尊奉しへ音

此は別に理由のなれどなり。フ音便は平安朝の古法なれば尊奉しへ音

便是近世の新法なれば排斥すとひふはーに古書のみに拘泥して、他を顧みざる、和學者の隨見と謂ふべし。然れども、今日家をイエ、聲をウグイスと書くと能はるは、世上多數決の定むる所にして、是亦風俗習慣の壓制の一例なりといふべか。

四 音便

m 音便は、f 音便と能く相類似す。其説明も亦粗同様なり。曰は、w に移りて、母音を同化し、ウの響を生ずるに至るなり。

賜	タマハル (tamafaru)	タウバル (taubaru)
頬	カミイ (kamibe)	カウビ (kaubé)
小路	コミチ (komichi)	コウヂ (kouji)
姫	オムナ (omuna)	オウナ (ouna)
樹字	カムシ (kamushi)	カウシ (kauji)

將有

アラム (aramu)

f 音便にて、m 音便にて、w 音よりウに化せらる。ば、畢竟母韻の響の弱きに基づくとも知るべし。i 音便と四音便と少しく異なる所あるは、m の w に變はらんとする時、尙其本性を失はれるに由り、弱き母韻を同化して後、其下の音に接し之を常に濁音に變ふるとなり。これ撥音と濁音の連聲法なり。

右の外、n 音便あり、是は m 音便に類す。

困

コヌズル (konzuru)

コウズル (kouzuru)

r 音便あり、r の發音を避くるに基づく。

取出

トリダ (toride)

トウダ (toude)

w 音便あり、其説明を音便に同じ。

參出

マキテ (mawide)

マウド (maude)

申マラス(mawashu)

支 2

22

此音便是、シのイとなるのみに限る。佐行の父音は、^シなりしか出ならずといへども、磨撮音を嫌ひて、少しく齒頭より息を吹出だす勞を省けば、イの母韻弱くして、之を留むる力なく、又山は自づから脱落つるなり。

アシタ (ashita)	アシタ (ashita)
サムシ (samushi)	サムシ (samushi)
マシテ (mashite)	マテ (maita)

明治二十九年四月草す

ハヒヲヘホ古音考

我國に於て昔五十音の假字を作りしと、アイウエオの母韻を基とし、之に牙齒舌唇等の父音を添へて、各行に字を設け、縦横に配列したるは、蓋し悉聲の呼方に因りたるなるべく、又其父音の分類も、其當時の呼方に基きしと論を俟たず、然るに今日に於ては、配列の順序こそ昔と同じけれ、同行にありて、同父音に屬すべきものながら、尙其呼聲の異なるものあり。古來唇音と唱へられたるハヒフヘホの如きは、即ち其一なり。余が聞知する所に由れば、九州山陰の一部分、北陸奥羽の大部分を除きては、ハヒヘホの四字、其呼聲、全國今は唇音にあらずして、寧ろ脣音と名くる方適せるが如し。古はさにあらずして、此の父音現今のフに屬する父音の如く、軽く吹きたる息の、兩唇の間より出づる音なりしなるべし。即

ち之を今九州山陰北陸奥羽の諸國にて用ゐる音を見ば、大差なかるべし。ハヒヘホの四字、唇音はあらずして、眞の唇音なりしと、證左多し。我五十音と同じく、悉曇の呼方に隨ひ、漢字音聲の分類を定めたる韻鏡を正すに、唇音に重輕の二種あり、各々之を清音、次清音、濁音、清濁音の四類に分ち、其字母、第一種の方を、幫、濁、並、明とし、第二種の方を、非、敷、奉、微とす。之を英字の音に比し、次清音は、出氣音なれば、其肩に標記を付して示せば、幫は p、濁は r、並は b、明は m に當り、非は t、敷は d、奉は v に當り、微は v 又は w に近き音なりと知るべし。

重唇音 p は純粹の清音なり。我國に、昔此音なし、故に幫母に屬する巴、卑、布、邊、連の如き、皆唇音ハヒフヘホの假名を以て寫したり。後には、バビブベボを以てし、此音を寫すに至りたれど、其は全く近來の事なり。此音清音なれば、普通唱ふるが如く、半濁音と呼ぶべき理由あるとなし。出氣音のり

も亦寫すに法なかりしが故、濁母に屬する頗拔音、片鋪の如きも、又ハヒフヘホの假名を以てせり。濁音 b 即ち並母に屬する文字は、バビブベボを以てし、清濁音 m 即ち明母に屬する文字は、マミムメモを以てし。此二類の音は、寫すに差支なかりしなり。

輕唇音に至りては、其清音は、我古音と類似の音なりしならんが、今は之をフハフヒフヘフホの如く表はせし。古はかゝる必要なかりしなり。清音 f 即ち非母に屬する文字、非、付、分、封等には、ハヒフヘホの父音之に適し、出氣音 v 即ち敷母に屬する文字、芨、芨、敷、峯、拂、等にも、已むを得ざるより、又寫すに此假名を以てせり。濁音 v 即ち奉母に屬する文字には、此音なきにより、バビブベボ威はマミムメモを使用せり。

以上重唇輕唇二種の支那音を寫すに、ハヒフヘホの假名を用ひたりと

せば、此父音唇音なりしと疑ふべき所にあらず。若し左にあらずして、ハヒヘホをして、今日の如き唇音ならしめば、支那傳來の唇音を寫すに、甚だ不適當なりしならん。

尙進んで支那音を質すに、其喉音に影、曉、匣、驗の四類あり。影母はアイウエオに當り、曉母は之を寫すに適當の音なかりしなり。此曉母は、英のヒに當れど、我には昔時之に對するヒ音なかりしといふは、現今差支なく、ハヒヘホの唇音を有する處より考ふれば、太だ奇なりと謂ふべし。匣母は影母の出氣音にして、時に或はヒ音の如く聞こゆ。喻母は、又、^ウの音なり。

斯く支那音を比較し來りて、我が當時の音を考ふるに、支那人の強く響かすヒ音に對し、寫すに適當の字なく、ハヒフヘホは、唇音なりしを以て、無論用る難く、遂に苦心の後、ヒ音と、其縦最も近きヒ音を以て之に代用

し、カキクケコを以て、其位置に當てたるなり。故に曉母に屬する海、漢、呵、喜、兄の如き、ハイ、ハン、ハ、ヒ、ヘイ、ヒ書かずして、カイ、カン、カ、キ、ケイと書きたるなり。現今にても、此等は皆、支那にては、依然としてヒ音なれば、往古我國人の、已むを得ずして、ヒ音に改めて書寫したるとは、容易く了解せらるべし。上海をシャンハイといひ、漢口をハンカウといひ、喜馬拉雅をヒマラヤといひ、帥兄をスヒンといひ、呵々をハ、といふが如きは、即ち其例なり。出氣音の匣母も、亦稍ヒ音に近きを以て、是亦多くはカキクケコにて書寫せり。下、戸、濱、痕、塞の類は、今も尙寫すに適當の假名なけれど、其眞音はカ、コ、クワ、コン、カンのヒ音にはあらざるなり。此轉音を辨知すれば、何故に、黃河はクワウカと書け、フワント本なるや、又何故に匈奴は、キヨウドと書け、ヒュンタヌにて、後のハンスなりや、理由を問はずして、自から首肯することを得べし。又我國にて漢音吳音の二種に假

名を付するに當り、一見しては、甚だ解し難く思はるゝものも、子細に音を正し來れば、自ら明かに悟り得べきものあり。即ち和の字漢音クワにして、吳音ワとなり、會の字漢音クワイにして、吳音エとなる類の如し。和の漢音は *hwei* にあらずして *hwei* なるが故、容易く *wei* となり、會の漢音は *hwei* にあらずして *hwei* なるが故、又 *wai* となり、再轉して *wai* となるなり。此は元 *we* 音の假名なり。

ハヒフヘホは、言の中或は下にあるときは、屢々濁音ハビブベボに變ずることあり。ハビブベボは純粹の唇音なり、故に其清音ハヒフヘホも亦、唇音ならざるを得ず。

日本橋 ニホンバシ	大宮人 オホミヤビト
身振 ミブリ	山邊 ヤマベ
頬骨 ホウボ	

是等は平常普通の轉音にして、奇とすべき所なきが如しといへども、尙聊か考慮を費せば、容易く其理を説明することを得べし。ハヒフヘホは、前に述べたる如く、兩唇の中間より、軽く息の出づるに由りて、生ずる音なり。之に濁音を與へ、一たび唇を閉ざして、後之を開けば、自らハビブベボの音を生ず、故に別に勞を費やすとなく、僅かなる語氣の差異にて、清唇音は濁唇音に變するなり。ハヒフヘホは今、關東關西諸國の音の如く口を開いて唱ふる唇音なりとせば、其濁音は如何なる類のものなりしならんか。寧ろガギグゲゴに近くして、ハビブベボには遠かりしなるべし。

ハヒフヘホの音便法も、亦其古音の唇音なりしを示す。此説前に既に述べたるに由り、容して再び擧げず。

以上之外、ハヒフヘホの唇音なりしといふ最も確實なる論據は、九州山

陰北陸奥羽の諸國に於いて、尚此音の流行を見るとなり、是蓋し古音の存じたるものにして、之を證するに、辯明を用ゐる必要なかるべし。

明治二十九年十二月草す

附記

本年一月帝國文學所載の上田万年氏の「語學創見」に P 音考あり、ハビフヘホの古音 P なるを證す。然れども、是は既に人の唱へし所にて、創見といふべきにあらず。

其論據を舉ぐれば、左の如し。

第一、清濁音韻の關係より、濁音 B に對し清音を P と定ひ、これ H にもあらず、F にもあらず、悉疊韻學支那韻鏡學の上にても、P の清と B の濁と相對するを見ても悟るべし。

其清音を H なりしと主張する者は、左の四問の答辯を求む。

(一) 古說に波行を唇音とせるは如何なる譯か。

(二) 何故に今日の如き喉的 H 音が濁る必要ありたるか。

(三) よし濁る必要ありたりとするも、喉的 H 音が濁るに臨みて、何故に唇的濁音とはなりたるか。

(四) 濁音 B は清音 P のさきだつ事なしに存在せしか。

其清音を P なりしと主張する者は、左の二項の答辯を求む。

(一) V 音の B 音に變せざると。

(二) H 音は古き音にあらざると。

(一) 楚漢音傳來の時、我國に H の喉音なかりしと。

(二) 楚漢の H は K を以て寫したると。

(三) アイヌに入りし日本語の事。

アイヌ語に P F H の三音あり、然るに我ハヒフヘホに對し、彼の P を用ひたる例あり。

第四「上古の音は、熟語的促音及び方言の上に存すると。」

上田氏の論に對して、本年二月國學院雑誌上に、三矢重松氏の批評あり。其説採るべきあり、採るべからざるあり、冗長に流るゝ恐あるを以て、其は省きて此處に擧げず。

上田氏が論據の第一段に、濁と清とを比し、Dに對してTあり、Gに對してKあり、故にBに對してPなかるべからずとするは、論理上否むべき所なし之を韻鏡に徵するに、支那語には、Pに對するB、Fに對するVありて、清濁の別ありしと顯著なり。氏がH音説主唱者に對する挑戦も亦力ありてきこゆ。余に於いては、古音のH音ならざりしは、始より諾ふ所なれど、然れども之をPならざるべからずと斷定するに於いては、餘り

に論理的の見解に過ぎたるにあらずや。PありてBなき言語は實際に存在す。之に反して、BありてPなき言語ありとするも、何の妨かあらん。又韻鏡の重唇濁音Bを我方にてハビブベボにて寫したりとて、其重唇清音Pを寫したるは、ハビブベボなるべきも、また等しくハヒフヘホなるにあらずや。濁音の方も、重唇音輕唇音B Vの別なく、共にハビブベボなりしを見れば、我濁唇音は、果して強き合唇音のBなりしか、是も聊か疑なきと能はず。此邊矢賀氏が上田氏に對する非難、稍明かならざれども、亦同様の論なるが如く覺ゆ。但し用例の、風福伏禪父拂粉翻反髮禪方凡法覆發等は、韻鏡にては覆の字を除く外は、皆輕唇音にて、決してPにあらず、拂翻は次清にしてD、伏禪父拂風は濁にしてV、他は皆Fなり。此等の諸文字、皆今の支那音にてHなりとは、福州音にてもあるか、それに

ても未だ當らす。碩學上田氏に對し、右の如き證例は餘りに杜撰に過ぎる様思はる。

次に上田氏は、F 音説主唱者に對ひ、我國に其濁音 V の存在と V の B に變はりしとの證明を要求せらる。余は先づ顎鏡の輕唇音が英語の F, V の如き半唇音なりしか、潛かに之を疑ふ。我古音の半唇音にあらざるべかりしは余即ち氏も之を説き、余も亦再三之を論せり。此音強き合唇音にもあらず、又半唇音にもあらざりしとせば、清の方は F とは同じからず、隨つて濁の方 V の存在を説明する必要なかるべし。但し矢田氏の如く、流行を喉唇など、唱ふるは、余は之を取らざるなり。H は K に近き喉音 (余は之を母韻と分ち、脣音と名づく、是は *glottal sound* なり) なり。只我 H は、其聲強からざるのみ。此點に於いては、余は固より上田氏の説を重んず。唇音の後世に至り、脣音に變はり來りしは、其原因言ふまでもなく、開口

の僅にて發音し、唇を用ひる勢を省きたるに由るなり。

上田氏又曰く、P は小兒すらも、發し得易き音にて、諸國今何處にても、之を擬聲語 (オノマトピヤ) に用ひる所なるに、上古其發音に苦しみしといふは、不思議なりと。之に對しては矢田氏が論難常れるが如し。古の平易なりし音、今は困難なるあり。今之平易なる音古は困難なりしともあるべきは、言語の變遷に伴ひて、數の免れがたき所なり。況して我唇音の古音は P に近かりしとせば、後に變じて純粹の P 由來りしとするも、決して不當の見解とはいふべからず。

との由或は D に移り、又更に H に轉じたるは、奈良朝前後の事なるべしとは、上田氏の説なり。奈良朝は未だ委しく知らず、平安朝の音便法に、ハヒフヘホのウに通ふを見れば、此唇音一時軽き V 音に移りたるにて、其の重き合唇の P ならざりしを示す。而して、其の且に轉じたるは、遙かに

近世の事なりとす。是は何時頃よりハヒフヘホの、アイウエオ又ソヰウエヲと混同するに至りたるか、之を探りて後、證するとを得べし。和學者が上音便には古法に詰ひて、母韻のみを記するを許し、ヒ音便には之を許さざるを見ても、其の近代の事なるを推し得べし。ハヒフヘホが、ヲヰウエヲに移るといふはいかゞ。音便にて脱落ち、ア(ヲ)イウエオに移るは、自然なれど、ヒがWに變はるといふは、其順序法に合ひたるものなりや。ヒよりWに移るは順なれど、既に開口呼となりたるヒよりWに轉するは逆なるべし。實際上此間に、稍理由あるが如く思はるゝは、ハの屢々ワとなるとなり、ヒフヘホ皆ヒを落とし、ハのみ獨りW音となるは訝しき所なり。其理を察するに、ヒは脱けんとして、アの母韻強く、是がために全く落つると能はず。然るに前より連聲の勢を受けたる結果、ヒは其位置に達せずして發せんとし、W音とはなることなるべし。俗語には、ハのヒふべし。

を捨てたる例多し。コレバコレハ (koreba koreha) は、コレヲ、コレワ (korewa) とならずして、コレア、コレア (korea korea) 又稍變じてコリヤ、コリヤ (korya korya) となるが如し。日語にては、ホも折々ヲの響に變はるとあり。上田氏が第二の論據、且を古音にあらずとせられしは、余の全然同意する所なり。梵漢のHを、我はKを以て寫したりと言ふ說、確實にして、難ずべき所はあらず。然るに矢田氏は、支那音の牙喉往來を以て、疑の種を爲すが如く見ゆれど、若し然りとせば、是未だ音韻の道に、精しからずといふべし。

第三段の、我唇音のアイヌ語に入りて、Pとなりし證は、アイヌ語には日本語の訛りたるもの多ければ、十分と見做すと能はず。

第四段の、佐音に、古音のPの存在すといふ證は、其價値甚だ少く、人を服せしむるに足らず。又沖繩薩摩九州の南部に、PH又Fの存在すといふは、

別に P 音説の證とはならず。

終りに曰ふ、余は我ハヒフヘホの古音の、希臘の χ 、獨逸の χ (古音)の如き
由類似の音なるべかりしを信す。余が此意見單獨ならんかと思ひ居り
しに、矢田氏の論を見るに、全く相符合するが如し。余は此に於いて、同説
の友を得たるを喜ぶ。

タナツテト古音考

タナツテトは、元來、母韻 a, i, u, e, o、ト、父音 t を合してなれる音なれば、正式
の組立にしたがへば、無論 ta, ti, tu, te, to なるべきを、今之音、タツの二字羅
馬字にて表はせば chi, tsu の響なるは、甚だ怪ひべし。此二音古より然り
しか、將、中世以後の轉音なるか、特に研究を要すべき事なりとす。然るに
發音は、時代と共に變遷するものなれば、今日の音を以て、既に形迹の絶
えたる古音を判斷するは、標準の頗るべき所なく、其の説く所、自ら正鵠
を失するに至るべし。しかして、今にありては、此の明かならざる問題に、
多少の光を與ふるものは、當時傳來の支那音との對照是なり。

今爰に比較せんとするは、ハヒフヘホ古音考に示したるが如く、韻鏡の
音なれど、之に先だち、注意すべきは、我古書に、我音を寫すに借用るられ

判すること能はず。第二十五轉、第四等、貌、夷は tiau, tiau', tiau, 挑、曉、難は tiau, tiau', tiau', なるべしと思へ。共にチャウ又たはテウを書きてあり。是れ稍 ti もナの關係を知るに足るべし。第三十五轉、第四等丁、頂、研は吳音 tiang, tiang, tiang, 漢音 teng, teng, teng。今之官話 ting, ting, ting, 汀、冥、聽は吳音 tsiang, tsiang, tsiang, 漢音 teng, teng, teng。官話 ting, ting, ting, なれど假名にては、吳音チャウ漢音テイ、古書の用法にては、テに當り、此類皆 oh の音ならず。是に由りて察すれば、ナにニの音ありしが如し。然れども是のみにては、論證薄弱にして、ナは ti なりしか、chi なりしか、未だ十分斷定を下すことを能はず。更に退いて、消極の方面より考ふれば、我古音に chi 音の存在せしは、疑はしと思はる、所あり。左に之を示さん。

韻鏡の齒音に、齒頭、正齒の二種あり。齒頭の方は、其字母、清は精にして、英の「s」、次清は清にして、t の音なり。正齒の方は、其字母、清は照にして tsch。次

清は穿にして、ts の音なり。通例此正齒音を s にて表はせ、斯くては、舌上音との區別相立ち難し。正齒音は齒に觸れて出で、舌上音は舌の中部长唇に接して生ずる音なれば、兩者其響太だ相近しといへども、其間に區別を設けるは不可なりとす。

齒頭正齒の支那音は、我方にては、サ、シス、セソの假名を以て寫すを例とす。試に之を古書に、シの音にあて、用ひたる漢字に徴するに、賁、茲、子、志、此、次、紫等は、齒頭音にして、tsi 若しくは tsu の音なり。之、芝、旨、叱、士、仕、示等は正齒音にして、tsch 若しくは tsch' の音なり。古よりナの音、今之聲の如くなりしとせば、此等の漢字はシの音に當てずして、ナの音に當つべき筈なり。齒頭音は姑く書き、母音と密接なる關係を有する、正齒音の文字を以て比するに、前に舉げたるもの、外、今之ナの音に隨へば、者のサ、又、シヤはチャ、主珠のス、又、シユはチユ、春のス、又、シユンはチユン、制のセ、又、セイ

は。エイ、諸のソ。メ。ショは。サ。ヨと書くこと適當なるべし。章、掌、障又は昌、敵、唱のシ。ヤウは、サ。ヤウとなり。爭、諍、壯、莊の漢音サウ、吳音シ。ヤウは、ツ。ア。ウとチ。ヤウとにて、其音の互に適当を知るべし。

又象聲文字の音について考ふれば、鏡中錚々の錚の字、漢音サウ吳音シ。ヤウ、之ヲツ。アング又。ヤングと改むれば金の聲となる。伐木丁々の丁の字、舌上音に屬し吳音サウなり。是即ちチ。ヤングにて、能く斧の音に適ふ。此字に音註爭となり。爭は正齒音に屬し、是もツ。アング又。ヤングなり。因りて知る、舌上音舌と正齒音舌とは、相近くして属々相通へるとを。字彙に、中の字、陟隆切音終、又其去聲は之仲切音衆とあり。本字は韻鏡に由れば、舌上音なるに、音註は正齒音なり。又反切の父音父、陟は舌上音なるに、之は正齒音なり。斯の如く、舌上正齒兩音の相通へるは、前の丁と争との關係の如し。之を本居氏が漢字三音考に於て辯するが如く、一概に訛謬なりとして排斥すべからず。

舌上音と正齒音とは、既に相近しとせば、支那音傳來の當時、舌上音のみを以て、特に我チに當て、何ぞ正齒音を以て其緣の稍隔たりたるシに當てたる、意ふに當時我國に舌音なく、ナはニの音なりし故、舌音を以て之に配し、シの方には齒音を以て偶せしなるべし。濁音の方を正せば、古書チに當てたる漢字は、地、泥、泊、尼、貳の類なり。此内地泥は舌頭音ニ、泊尼は舌上音ニ、貳は半齒音ニなり。此音の漢字、多くは開合第三等に位し、舌上音に屬す。第四等にありては、ナのデとなると、清音ニのテとなるが如し。舌上音と正齒音との關係は、ナとニとの關係にして、清音ニのテとなるが如し。て論じたる時と同様なれば、重ねて此處に説くとを略す。チをニの音なりとせば、チは無論ニの音ならざるべからず。

次に移りてツの音に及ぶべし。之に當てたる漢字、都、闕、通、鬼、羌、屠は舌頭

音に屬し、又の音なり、因りて案するに、古のツは、今の如き^{tsu}にわらずして、タ(ta)、テ(te)、ト(to)と其組立を同じうする、單音^{tsu}なりしなるべし。是は誠に賭易き道理なり。往昔我に^のの音ありたりとせば何を苦しんでは齒頭音構^{tsu}、従の字母に屬する文字を、サシスセソの假名に用ひたる。細かに檢し來れば、スの音に當てたる周、酒、取、州の如きは、皆ツユの音なれば、ツの音に當つべき筈なり。然るに此法を行はざりしは、當時我に^のの音なかりし證なり。

地名に漢字と假名と左の如き對照あり。

敦賀 ツルカ (tsuru ka)

駿河 スルカ (tsuru ka)

右の用法を見て、^のに當つるにツを以てし、^{tsu}に當つるにスを以てし
たるを悟るべし。

濁音の方は如何ん、ヅの音に用ひたる漢字は、頭、豆、途、脚、徒にして、皆舌頭音の定母に屬する文字なり。しかして其本音は皆^ツにして、^{tsu}にあらず。皆は齒頭音從母の音なり。然るに此位置の字をザジズゼヅに用ひたるは、取りも直さず當時我に此音なかりしを證す。古のヅは^ツの音なりしと疑ふべからず。

曾て四國の或る部分に^{tsu}の兩音の今も尙残り居るといふとを聽得たるとあるが、未だ其信説を辨せず。是は音韻學上大に穿鑿を要すべき事なり。

明治二十九年十二月草す、

明治三十一年七月廿三日印刷

同

年七月廿六日發行

定價金貳拾錢

神奈川縣下高座郡海老名村大字
中新田千五百二十九番地

著作者

大島正健

發行者

東京府下北豐島郡巢鴨町
大字上駒込村拾八及拾九番地

同町區内幸町一丁目五番地

山縣悌三郎

印刷者

中西美重藏

同町區内幸町二丁目五番地

ジャパン・タイムス社

版權

所 有

印刷所

東京府下北豐島郡巢鴨町大
字上駒込村拾八及拾九番地

發行所

內外出版協會

漢字と假名

定價金十五錢
郵 稅 二 錢

社會、政治、文學、科學、教育、并...
教上の諸問題を正直に、自由に大膽
に評論討議す。確信にあらざれば語
らす、獨特の思想を含有せざる寄書
は載せず、熟讀せざる書は評せず、正
直と認めざる廣告は掲げず、而して

古は漢語漢字の廣告と其端正筆及び假名使用法に
つち著者獨創の意見を發表したる書なり

發行所

内外出版協會

大島正健著

支那古韻考

前編 定價金三拾錢

郵稅金六錢

本誌載錄の記事に對しては、主筆内
村鑑三井に持主山縣悌三郎悉く其言
責に任す。

定價金五錢、十部前金四十五錢
郵稅一部五厘、爲替拂渡駁込郵便局

東京府下北農島郡上駒込村

拾八及拾九番地

東京獨立雜誌社

(古語書籍本局四百三十八種)

發賣所

(東京日本橋通三丁目) 丸善株式會社書店

音韻漫錄附錄

主要なる正誤

四十五頁十一行 イナバ (Inaba) (二二三)

五十七頁八行 サガミミナギ サガミミナギ

五十八頁一行 ガギグゲゴ

六十頁十二行 ナンジ

六十七頁八行 ソの符號

以下促音のソは總べて

七十頁九行

關聯

ワラフテ

關西

同 十 行

スルカ (suru ka) (tsuru ka)

八十三頁八行 出氣音

P • 輕唇清音P

八十九頁六行

九十一頁四行

九十一頁八行以下 矢田氏

同 五行

ガギグゲゴ

同 十二行

ナシ

百頁 一行

ナシ

百二頁 六行

ナシ

百三頁 八行

ナシ

音 • 哽音

Fo Fo Fo

Fo

Fo

Fo

Fo

Fo

凡。 三矢氏

凡。

凡。

凡。

凡。

凡。